

一般的身体加工への意識 ——現代の身体観に関する一考察

谷本 奈穂*

要 旨

社会学の領域において、「身体」というパースペクティブが注目されている。そこでまず本論では特にA・Giddensによるボディプロジェクト (body projects) 概念を検討した。

次に、アンケート調査から、一般的な身体加工に関する意識を分析し、次のことを明らかにした。一つは身体加工において準拠されているのは、「自己自身」、「他者の視線」、「社会の視線」であること (①自己系, ②他者系 (消極) 系, ③他者 (積極系), ④社会系と命名)。もう一つは一般的な身体加工は、他者のため (②③), 社会への配慮のため (④) だけでなく、自己満足のため、自分らしくあるため (①) に行われることが多いことである。

また、そこにはジェンダー差があり、同じ「他者の視線」を意識するのでも (③他者 (積極) 系), 男性は不特定多数な異性を、女性は自分の好きな特定の人だけを念頭においている。さらに女性は、自己満足や自分らしさといった「自己自身」を準拠することが多い。そして、外見の良し悪しでも差異が見いだせ、外見をほめられる経験の多い人は、①自己系, ③他者 (積極系) の理由を挙げ、ほめられる経験が少ない人は、②他者 (消極系) の理由を挙げる。①自己系の理由を多く挙げるのは、女性であり、外見をよくほめられる人であった。このような一般的な身体加工に関する意識は、他の身体における現代的現象と関連している。

Awareness of General Body Processing: Body Consciousness in the Present Day

Naho TANIMOTO

Abstract

In this paper, I discuss the concept of “body projects” as argued by Giddens, and then survey attitudes among young people. There is high level of interest in perspectives of “body” among many sociologists. Through the surveys, I found the following: body processing is based on “self-satisfaction”, “others’ gaze”, and “consideration of society”, I named these factors self (=1), others (passive) (=2), others (positive) (=3), and society (=4). General body processing is done because of not only 2 & 3 & 4 but also 1. There is a gender difference in this grouping. Men are concerned about unspecified women, women are concerned about a specific man. In addition, women value their individualities. Personal appearance decides this grouping. The person who receives praise for their facial appearance cites reasons 1 & 3, the person that does not receive such praise cites reason 2.

* 関西大学総合情報学部

1 問題意識

社会科学の領域において、近代は変容しつつあると見なされる。論者によって時代の捉え方は異なり、ハイモダニティ、レイトモダニティ、ポストモダニティと論じ分けられているが、いずれも、現代が勃興期における近代とは違っていることを認識している。ハイ／レイト／ポストモダニティの議論において、当然、主体の新しいあり方は問い直されている^[1]。

主体を問い直す議論の中でも、近年、「身体」というパースペクティブを取り入れているものが注目を集めている。たとえば、土井隆義(2002)^[4]は1969年に自殺した高野悦子と1999年に向精神薬で中毒死した南条あやを比較し、1969年の時点で自己は思想の中に求められていたが、1999年の時点では身体の中に求められるようになったという人間像の変容を描き出している。「高野は、自己の投錨点を思想のなかに求めようとした」のに対して「南条は、自己の投錨点を身体の中に求めようとした」(土井 210-211)という。あるいはS・Nettleton(1995)は健康と病の社会学の中で^[5]、西洋医学がこれまで身体を社会環境的文脈に位置づけてこなかったことを批判しながら、身体にまつわる健康食品やアロマセラピー、エアロビクスなども研究の対象になることを主張する。確かに、近年の美容整形の流行、エステティック・クラブやフィットネス・クラブの興隆、健康サプリメントやダイエット薬の普及、ボディータトゥーや茶髪の流行を考えれば、「身体」は現代的主体のあり方を考察するのに重要な視座となろう。このような身体への注目をB・Turner(1984)は「身体の社会 somatic society」というタームを用いて表わしている^[6]。

これら身体に関する議論の中でも中心的な概念となるのが、A・Giddens(1991)によるボディプロジェクト(body projects)であろう^[7]。この概念は、ライフコースを通して本質的に身体が「未完成」のものであること、そして身体を変形させて完成させるような文化的圧力がかかっていることを示唆するものである。また身体を変形させることを通じて、人は自己アイデンティティを作り出したり維持したりするということも示唆している。

ボディプロジェクトのような発想は、C・Shilling(1993)^[8]やM・Featherstone(1991)^[9]、あるいはS・Bordo(2003)^[10]にもみられる。たとえばFeatherstoneは、消費主義によって身体が自己表現の「乗り物」にさせられると主張している。Bordoは、身体は実際は歴史性や物質性を持つものなのに、無限に改良できるという考えがあり、それは幻想であると批判する。彼女によれば、身体は、意志によって選択したり作り出したりできる「プラスチックボディ plastic body」となってしまうという。

つまり、「社会・文化に煽られる形で、自己表現のために身体を変える」というのが現代的主体の特徴であると主張され始めているのだ。どのような身体が望ましいとされるのか。さらに、どの程度までの改造ならば、さして抵抗なく人々に受け入れられるのか。そうした「自然な身体 natural body」／「人工的な身体 plastic body」の境界をめぐるイメージが大きく変わりつつある今だからこそ、身体加工に関する考察が必要である。

2 方法

筆者は身体加工の中でも、整形手術（プチ整形を含む）という事象を考察しようとしている。そのために（a）身体論の先行研究レビュー、（b）一般の人たちへのアンケート、（c）整形手術を経験した人へのインタビュー、（d）施術をおこなう医者へのインタビューを行っている。本稿ではその中でも（b）一般の人たちへのアンケートをとりあげる。アンケートの質問は多岐にわたっているが、筆者は「一般的な身体加工に関する意識」と「美容整形に関する意識」を取り扱っている。今回は、「美容整形に関する意識」ではなく、「一般的な身体加工——顔を洗ったり、髪を切ったりすること——に関する意識」を考察したい。というのも、美容整形の増加は、それ単体の出来事ではなく、私たちの一般的な身体加工に関する意識に根ざして起こった出来事であるからだ。したがって、本稿はアンケートの中から特に「一般的な身体加工に関する意識」を取り上げて考察していくことにしよう（(b)-1）。なお同アンケートにおける「美容整形に関する意識」については別稿を用意する予定である（(b)-2）。

身体観に関わるアンケートは、2003年、2004年とプレ調査をおこない、2005年に本調査をおこなった。2003年は須長史生（昭和大学）と西山哲郎（中京大学）と共同で、10月に関東・東海・関西圏の大学生男女を対象にアンケートを実施し486票（男性212名、女性274名）の回答を得た。その結果をもとに調査票の質問項目などを修正し、2004年7月にアンケートを再度おこなった。2004年の調査は、須長史生（昭和大学）、西山哲郎（中京大学）、村上幸史（神戸山手大学・当時は大阪大学）と共同で、東海圏の大学生を対象に114名（男性41名、女性63名）の回答を得ている。この調査から再び質問項目などの修正をはかった。

2003、2004年のプレ調査をもとにしながら、2005年11月に本調査を西山哲郎（中京大学）と村上幸史（大阪大学）と共同でおこなった。関西圏・東海圏の大学生を対象にアンケート用紙を配布し、約30分かけて回答してもらいその場で回収した。したがって回収率はほぼ100%となり、合計で765票（男性354名、女性408名）を回収した⁽²⁾。今回論述するアンケート結果（2005年）の特徴は、アンケート対象者が異なるプレ調査（2004、2005年）の結果の特徴とほぼ一致していることも付記しておく。

調査の問題点としてサンプルが有意に選出されていることがあげられよう。アンケート対象者が大学生であるので若い年代の身体観に限定されてしまうことから、本調査の結果を身体意識として完全に一般化するのは困難かもしれない。とはいえ、若者の意識は来るべき社会意識のひな形である。さらに、大学進学率の上昇に伴い大学生の社会階層もさほど限定的でなくなった⁽³⁾。よって、本調査の結果から、現代の身体意識を近似的に把握するには十分であろうと考える。

3 分析と考察

3.1 一般的な身体加工をする理由

「あなたが一般的な身体加工をするのはなぜか」という質問に対する回答が図1に示される。ここでの一般的な身体加工は、髪を切ったり洗顔したりすることを指している。回答群は下記1～12である。

1. 同性から注目されたいから
2. 流行に乗り遅れないため
3. 異性にもてたいから
4. 好きな人に好かれるため
5. 自己満足のため
6. 自分らしくあるため
7. 自分の中身を変えたいから
8. イメージチェンジをするため
9. 精神安定や癒しのため
10. 人に笑われないため
11. 清潔感を保つため
12. その場にふさわしい身だしなみのため

「自己満足のため」という回答が66.1%を占めて圧倒的に多い。また、「その場にふさわしい身だしなみとして」が45.5%、「好きな人に好かれるため」が43.8%、「自分らしくあるため」42.9%と次に多いことが分かる。

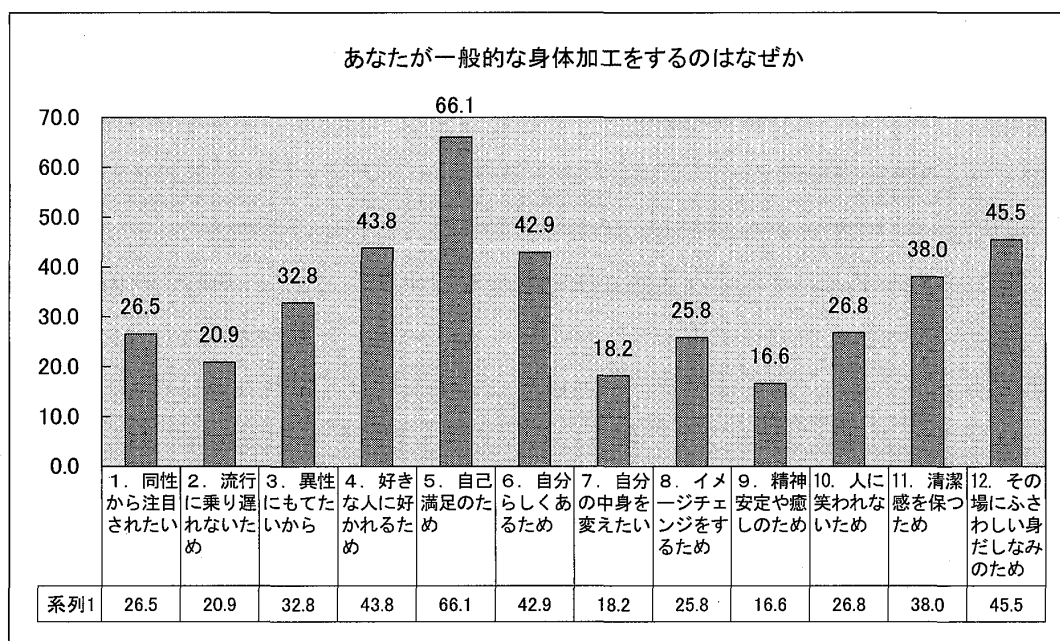


図1 一般的身体加工の理由

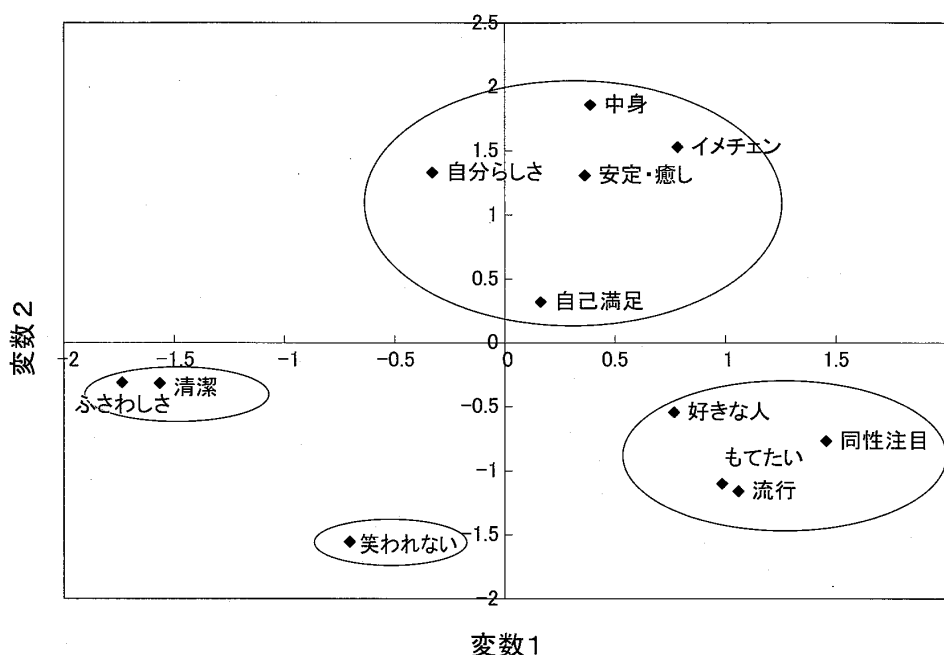


図2 身体加工の理由の類型

次にこれらの回答を数量化三類によって類型化した。その結果が図2で示されている。

図2によると、(整形ではない)一般的な身体加工の理由は四つに分かれている。「自己満足のため」「自分らしくあるため」「イメージチェンジをするため」などの回答(①)、「笑われないため」という回答(②)、「好きな人に好かれるため」「異性にもてたいから」「同性に注目されたいから」などの回答(③)、「その場にふさわしい身だしなみ」「清潔感を保つため」という回答(④)である。

一番はじめの「自己満足のため」などの回答(①)が目指しているのは、あくまで自分自身が満足することである。他者の視線に対する意識は希薄である。よって、これらの回答群は身体加工をあくまで自分のためにするという意識を表しており、「自己系」と名付けられるだろう。

二つめの「笑われないため」というのは(②)、自己系に比べて他人の視線を意識している。ただしその意識の仕方は防衛的である。身体加工によって、他者との関わりを深める方向ではなく、むしろ他人との関わり断つ方向にあるとあっていいだろう。「せいぜい笑われないようにする」という形で他人からの侵害を避けようとしているからである。他者を意識しているがそれは関わりを消極的なものにするためなので、「他者(消極)系」と名付けよう。

三つ目の「異性にもてたいから」「同性に注目されたいから」などの回答は、完全に他人を意識している。さらに、他者(消極)系と違って、より積極的に他人に好かれようとする欲望にもとづいた回答群であるともいえる。よってこれらは「他者(積極)系」と名付けよう。

最後の「その場にふさわしい身だしなみ」「清潔感を保つため」といった回答群(④)は、明らかに自己を照準したわけではない。だが、他者の視線を意識したといういいかたでも不十分である。ふさわしさや清潔感は、「誰か」に対して発揮されるというより、「周囲・場」に対

して持ち出されるものだからだ。そこで、「周囲・場」をやや広く捉えて「社会」と考えれば、これらの回答群は「社会系」と名付けることができる。

とすると、アンケート回答者の一般的な身体加工は①自己系、②他者（消極系）、③他者（積極系）、④社会系といった理由からなされることが分かる。したがって、一般的な身体加工において準拠されているのは、「自己自身」、「他者の視線」、「社会の視線」である。いいかえれば、人は自己・他者・社会のいずれかに照準をあてながら体に手を加えるとの仮説が成り立つだろう。

また、その中でも現在では自己を照準にした理由が主流である。「自己満足のため」が66.1%、「自分らしくあるため」が42.9%など総じて高い割合であった。つまり「人は、他者や社会のためというより、自分のために一般的な身体加工をおこなう」という仮説も成り立つ。これは、Giddensたちによる、現代人は「身体加工を通して自己アイデンティティを構築し維持する」という主張を裏付ける結果となっている。

3.2 ジェンダーによる差異

一般的身体加工において、人は自己・他者・社会に準拠し、その中でも自己を特に照準することが分かった。それではそこにジェンダー差は見られるだろうか。身体加工の理由に関するアンケートの回答を χ^2 乗検定で分析した結果が表1で示される（***： $p < .001$ ，**： $p < .01$ ，*： $p < .05$ として表示）。

ジェンダー差で有意な差が最も見られた項目（ $p < .001$ ）は、「同性から注目されたいから」、「異性にもてたいから」、「自己満足のため」、「イメージチェンジをするため」である。その他にも「好きな人に好かれるため」、「自分らしくあるため」、「流行に乗り遅れないため」といったところも十分な有意差が見られる（ $p < .01$ ）。男性は「異性にもてたいから」を理由に挙げているが、女性は「同性から注目されたいから」、「自己満足のため」、「イメージチェンジをす

表1 「あなたが身体加工をするのはなぜか」ジェンダー差

	男	女	χ^2 値
1. 同性から注目されたいから	17.3	34.6	29.205***
2. 流行に乗り遅れないため	16.7	24.6	7.052**
3. 異性にもてたいから	45.6	21.9	48.272***
4. 好きな人に好かれるため	38.8	48.4	7.062**
5. 自己満足のため	57.8	74.0	22.158***
6. 自分らしくあるため	36.8	48.4	10.333**
7. 自分の中身を変えたいから	16.1	20.1	2.024
8. イメージチェンジをするため	19.3	31.4	14.668***
9. 精神安定や癒しのため	14.7	18.5	1.898
10. 人に笑われないため	28.3	25.8	0.614
11. 清潔感を保つため	42.8	34.2	5.958*
12. その場にふさわしい身だしなみのため	44.2	46.9	0.570

表の値は各項目が選択された割合を示す(%)。N=765 (*** $p < .001$ ，** $p < .01$ ，* $p < .05$)

るため」あるいは、「好きな人に好かれるため」、「自分らしくあるため」、「流行に乗り遅れないため」を挙げているのである。

つまり男性は不特定多数な異性にもてたいと考えて身体を加工するのに対して、女性は、自己満足や自分らしさのため、流行などのファッションのため、同性から注目されるために身体を加工する（異性を意識する場合は、不特定多数の男性ではなくて、自分の好きな特定の人だけを念頭においている）。

ここで確認しておきたいのは、③他者（積極系）における男女の認識の違いである。身体を変える場合に準拠点となる（不特定の）「他者」とは、男性にとって「異性」であり、女性にとっては「同性」となる傾向があることだ。さらに、①自己系である「自己満足のため」、「自分らしくあるため」といった項目は女性に多く支持されることから、女性の方が身体加工の際に、自己を準拠することである。

3.3 外見のよさによる差異

一般的な身体加工の理由にジェンダー差はみられた。それでは、外見のよい人・よくない人では違いは見られるだろうか。ここでは外見の良し悪しは分析者による判定は下せない。あくまで回答者による自己判断による。

調査ではまず「自分の外見について自分で評価してください」という質問に対して、「かなり優れている」、「どちらかといえば優れている」、「どちらともいえない」、「どちらかといえば悪い」、「かなり悪い」の五件法による回答群を用意し一つに丸をつけてもらった。「かなり優れている」、「どちらかといえば優れている」をまとめて「外見に自信あり」群とし、「どちらかといえば悪い」、「かなり悪い」をまとめて「自信なし」群とした。「どちらともいえない」はそのまま「どっちでもない」群とした。

上記のように回答群を三つに分けて、 χ^2 二乗検定で分析した。それが表2である（***：p

表2 「あなたが身体加工をするのはなぜか」外見に対する自信差

	外見に自信あり	どっちでもない	自信なし	χ^2 値
1. 同性から注目されたいから	44.6	26.0	22.5	14.801*
2. 流行に乗り遅れないため	28.4	21.1	19.3	2.967
3. 異性にもてたいから	51.4	31.6	30.1	12.827*
4. 好きな人に好かれるため	52.7	45.5	40.2	4.427
5. 自己満足のため	74.3	67.9	63.1	3.982
6. 自分らしくあるため	47.3	44.2	40.8	1.353
7. 自分の中身を変えたいから	12.2	17.4	20.9	3.486
8. イメージチェンジをするため	29.7	26.3	24.5	0.907
9. 精神安定や癒しのため	21.6	16.9	15.4	1.690
10. 人に笑われないため	25.7	22.6	32.7	8.758*
11. 清潔感を保つため	43.2	38.4	36.9	1.011
12. その場にふさわしい身だしなみのため	41.9	47.6	44.1	1.312

表の値は各項目が選択された割合を示す(%)。N=765 (*** p<.001, ** p<.01, * p<.05)

<.001, **: $p < .01$, * : $p < .05$ として表示).

外見に自信のある人は「同性から注目されたいから」「異性にもてたいから」、自信のない人ほど「人に笑われないうえ」に身体加工をすると回答し、有意差は見られたものの ($p < .05$), やや不十分な結果に思われる。そこでさらに、「あなたは自分の外見について人からよくほめられますか?」という質問で分析軸を立ててみたい。先の外見に対する自信の質問よりも次の点で優れている。すなわち「人からほめられる」経験の有無を問うことで、先の主観的な判断よりも、やや客観性が高まる点である⁽⁴⁾。「頻繁にほめられる」、「時々ほめられる」、「どちらでもない」、「あまりほめられたことはない」、「全くほめられたことはない」のうち一つに丸をつけてもらっている。ここでも同じく、「頻繁にほめられる」、「時々ほめられる」をまとめて「外見ほめられる」群とし、「全くほめられたことはない」、「あまりほめられたことはない」を「ほめられない」群として、「どちらでもない」は「どっちでもない」群とした。

表2と同様に、回答群を三つに分けて χ^2 乗検定で分析した。それが表3である (***: $p < .001$, **: $p < .01$, * : $p < .05$ として表示)。

「同性から注目されたいから」「好きな人に好かれるため」「自己満足のため」にはっきりした有意差が見られる ($p < .001$)。「自分の中身を変えたいから」($p < .01$)、「流行に乗り遅れないため」「異性にもてたいから」「人に笑われないうえ」($p < .05$)にも有意差が見られた。

つまり、外見をほめられる人ほど「同性から注目されたいから」「好きな人に好かれるため」「自己満足のため」(そして「流行に乗り遅れないため」「異性にもてたいから」)身体を変え、外見をほめられない人は「人に笑われないうえ」に身体を加工していることが分かる⁽⁵⁾。

すなわち、外見をほめられた経験が少ない人は、笑われないうえにという②他者(消極系)の身体加工を行っている。ほめられる人は、自己満足という①自己系の理由、同性や好きな人に好かれるためという③他者(積極系)の理由を挙げている。

表3 「あなたが身体加工をするのはなぜか」外見を誉められる経験との差

	外見ほめられる	どっちでもない	ほめられない	χ^2 値
1. 同性から注目されたいから	36.4	20.2	19.1	26.790***
2. 流行に乗り遅れないため	24.3	22.2	15.7	6.165*
3. 異性にもてたいから	38.0	27.6	30.6	6.928*
4. 好きな人に好かれるため	54.8	36.0	36.6	25.807***
5. 自己満足のため	74.8	59.1	62.1	16.867***
6. 自分らしくあるため	44.9	43.3	40.9	0.891
7. 自分の中身を変えたいから	19.9	12.8	20.9	5.691**
8. イメージチェンジをするため	28.0	26.1	23.0	1.810
9. 精神安定や癒しのため	18.8	12.8	17.0	3.203
10. 人に笑われないうえ	24.6	23.6	33.2	6.658*
11. 清潔感を保つため	35.5	40.9	40.0	1.915
12. その場にふさわしい身だしなみのため	41.7	48.3	49.4	3.828

表の値は各項目が選択された割合を示す(%). N=765 (***: $p < .001$, **: $p < .01$, * : $p < .05$)

4 まとめ

GiddensやShilling, Featherstone, Bordoらが提唱するようなボディプロジェクトが社会科学の領域で重要な議論になってきていることは、本論の冒頭で確認した。つまり現代人は身体加工を通して自己アイデンティティを構築し維持するというパースペクティブが重要になったということである。本調査では、このボディプロジェクトをあるていどまで裏付けることができた。一般的な身体加工は、他者のため(②他者(消極系)③他者(積極系))、社会への配慮(④社会系)のためにするという理由も根強く存在するが、自己満足のため、自分らしくあるため(①自己系)に行われることが、非常に多くなっているからである。

また、①自己系の理由を多く挙げるのは、女性であり、外見をよくほめられる人であった。このことから、自分を照準するような身体観は「女性」と「外見のいい人」に特に現れていることも推察できる。

ところで、筆者(2004)^[11]は先行する論文で、美容整形のような身体加工の理由付けとして、これまで②他者(消極系)や③他者(積極系)の言説が採用されてきたことを指摘した。すなわち、整形の理由付けとして「異性にもてたいから」、あるいは「他人にバカにされないため」という言葉が選択されてきたということである。「異性にもてたいから」人は身体加工をおこなうのであるという説明は、たとえば蔵琢也(1993)^[12]の議論に見ることができる。また、「他人にバカにされないように」身体に手を加えたいという言い方は、日本のテレビ番組に見いだせるし⁽⁶⁾、K・Davis(1995)^[13]が考察した美容整形経験者が過去に経験してきたと語る苦悩話に端的に表れている(ちなみにDavisはそれを「苦悩の軌跡(a trajectory of suffering)」と呼んでいる。同時に、自分を「みにくい」と考える女性たちを「身体の囚人 a prisoner of her body」とし、彼女たちが身体に縛られているさまを記述している)。だが、先行論文でも考察したように、メディア上においては美容整形の理由付けとして①自己系のものが増えつつある。また実際にも、筆者の近年のインタビュー調査で、美容整形をまったく自己満足のためにおこなうと経験者が語る人が多いのが分かってきた(2005~2007年日本での調査、2005年ドイツでの調査、2006年韓国・台湾での調査による。2方法で示した(c)に当たる。こちらも別稿準備中)。

本論の考察からは、こういった美容整形観の変化も、日常的におこなう身体加工の意識と地続きであることが分かった。つまり、一般的な身体加工では他者や社会のためではなくて明らかに自己を目指してなされる(自分らしくありたい、自己満足したい)こと、整形においては「異性にもてたい」「他人にバカにされたくない」といった理由だけでなく「自分らしくありたい」という理由でおこなう人がいること。この二つの現象の間には連続性が見られることが分かった。またプチ整形を積極的におこなう人は、男性より女性が多く、自分を「醜い」と考えて苦悩する「身体の囚人 a prisoner of her body」であるより、服やメイクといったおしやれに気を使うような人が多かった(筆者の調査による)。これも一般的な身体加工で、自分

らしさを称揚するのが「女性」であり「外見のいい人」であったことと通底するだろう。

よって、これから美容整形研究をおこなう時に、男性よりは「女性」、またコンプレックスから整形をおこなう人よりも「より美しくなりたいからおこなう人」人に注目すれば、新たな身体観や新たな主体像を見いだせる可能性が高いといえる。

そして、美容整形に限らず、冒頭に挙げたエステティック・クラブやフィットネス・クラブの興隆、健康サプリメントやダイエット薬の普及、ボディータトゥーや茶髪の流行といった社会現象も、すべては単独で起こったものではない。本稿で分析した一般的な身体加工に関する意識に根ざしているだろう。一般的身体意識を考察することは、さまざまな身体に関する社会的変化や現象を説明するための第一歩なのである。

したがって、本論の意義は次の二点にある。第一に、理論家たちの提唱する「ボディプロジェクト」をあるていど実証したこと。第二に、身体に関わるさまざまな現象の研究に対して一助となることである。

謝辞

分析に関して村上幸史氏（神戸山手大学）から多大な協力をいただいた。村上氏に心よりの感謝をささげる。

本稿は文部科学省科学研究費補助金・若手研究（B）課題番号（17730325）の助成を受けて書かれたものである。

注

- (1) 主体を問い直す議論は数多くある。たとえばジャン＝リュック・ナンシー（1996）^[1]たちの試みでは、ポストモダンの論者と見なされているJ・デリダや、J-F・リオタールらも参加し、フランス哲学の立場から現代的主体を問い直している。日本では、大澤真幸（1995）^[2]がオウム真理教やオタクに、東浩紀（2001）^[3]もオタクに注目することで主体のありようを模索している。
- (2) なお、このときに「整形したいか」との質問に対して、41.6%の者が「したい」と答えている（男性のうち24.5%、女性のうち63.1%である）。
- (3) 実際アンケート回答者の保護者の職業もかなり分散し、大学生の社会階層が高いものに限定されていなかった。
- (4) 実際には外見にやや自信があっても、「自信あり」項目に丸をつけにくい人がいた可能性がある。しかし「他人にはほめられるかどうか」なら回答しやすいという利点もある。
- (5) ちなみに「自分の中身を変えたいから」という理由は、「ほめられる人」「ほめられない人」両方とも多く、「どちらでもない人」に少ない。ほめるにせよ・ほめられないにせよ他者からの評価を感じる人ほど、外見を変えることで中身も変わると信じており、自らの外見を「普通」なものとして評価されている人は、外見と中身を連関させていないと思われる。
- (6) フジテレビ系列『ビューティーコロシウム』2001年より放映。番組は、外見のせいで周囲からいじめられたという女性たちが整形をしてきれいになるというストーリーで組み立てられていた。

参考文献

- [1] ジャン＝リュック・ナンシー編 1996『主体の後に誰が来るのか?』現代企画室。

- [2] 大澤真幸 1995『電子メディア論』新曜社.
- [3] 東浩紀 2001『動物化するポストモダン』講談社.
- [4] 土井隆義 2002「生きづらさの系譜学」『文化社会学への招待』世界思想社 205-233.
- [5] Nettleton, S., 1995, *The Sociology of Health and Illness*, Polity Press: Cambridge.
- [6] Turner, B. S., 1984, *The Body and Society*, Blackwell: Oxford.
- [7] Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late*, Polity Press: Cambridge.
- [8] Shilling, C., 1993, *The Body and Social Theory*, Sage: London.
- [9] Featherstone, M., 1991, *Consumer Culture and Postmodernism*, Sage: London.
- [10] Bordo, S., 2003, *Unbearable Weight: feminism, Western culture, and the body*, University of California Press Berkeley, L.A., London.
- [11] 谷本奈穂 2004「ビフォー／アフターなき整形——過程としての自己・妄信する自己——」『メディア文化を読み解く技法』世界思想社 51-76.
- [12] 蔵琢也 1993『美しさをめぐる進化論』勁草書房.
- [13] Davis, K., 1995, *Reshaping the Female Body*, Routledge.